

平成 25 年度入試の出題の意図・採点総評



北九州市立大学

一般選抜

外国語学部	P 1
経済学部	P 4
文学部	P 7
法学部	P11
地域創生学群	P13
国際環境工学部	P14

推薦入試

外国語学部	P24
経済学部	P26
文学部	P27
法学部	P29
国際環境工学部	P30

A0 入試

外国語学部	P37
地域創生学群	P38

平成 25 年度入試の出題の意図、採点総評 《一般選抜》

◆ 外国語学部 前期日程（英語）

<出題の意図・ねらい>

試験では高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現能力を判定する。

<答案の特徴と傾向>

問題 1 は長文読解。言語・文化の問題（世界で言語が急速に消滅していく理由）について論じた英語長文を読み、内容を正確に理解できているか問う問 1（1）～（7）については概してよくできていた。問 2 は指示語が正確に把握されているかどうかで差が出た。問 3 は 2 行前の **to bring** 以下を抜き出している答案が目立った。せっかく該当箇所を抜き出しても、中途半端な抜き出しが多かった。問 4 の指示語はほぼ正解だったが、きちんとその部分が日本語になるかどうかで点が分かれた。

問題 2 も長文読解。スティーヴ・ジョブズの経営戦略に関する英語エッセイを読み、内容を正確に理解できているか問う。問 1（1）～（6）については全体的にできがよかった。問 2 の指示語では、人称代名詞は一人の人に対してはだいたい一貫して遣われると思われるのに、**He** と **him** を違う人物とする解釈が多かった。問 3 では、コンテキストからジョブズの計画に重役会が抵抗したという状況が読み取れるはずだが、アップル社の人員削減やジョブズの雇用ないし退社に結びつけた答案が散見した。

問題 3 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。**be due to** や **not...but** の構文を知っているか見るところ。文法やスペリング、語順、語法にしばしば不正確なところが見られた。単語をただ直訳してはめるような答案が目立った。

問題 4 も和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。「全年齢で」などがうまく表現できるか見るところ。正確で適切な語彙が欠けている。語順、語法の点でしばしば間違いを犯している。主語に合った動詞のかたちもできていない。

問題 6 は英文エッセイ。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを書く英語力を問う。本の題を選んで書くとしたらという問題で、文法的に正確に書けるかどうかで差がついた。人気のある本の題は「ペット」「友人」「両親」「私の生活」。これらの題ではあまり創造的なものはなかったけれど、納得させるものもあった。「侍」「城」「龍馬」「スイーツ」「日中関係」なども本の題としてあげられた。

◆ 外国語学部英米学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題 1

問 1 弁護士の女性がキャリアの追求と母親になることとの間で悩み、最終的に母親になることを選択するという文である。英文がかなり複雑な箇所もあり、話の流れがきちんと把握できているかどうか、また英語がきちんと読みこなせているかを問う問題である。

問 2 問の内容は現代社会において普遍的なものであり、自分なりの議論を順序だてて論理的に展開できるかどうかの評価のポイントとなる。

問題 2 開発と自然保護という普遍的なテーマで各自の意見を問う問題であるが、自分の論を支持する根拠を明確に出せるか、それを論理的に英文として表現できるか、がポイントである。

<答案の特徴と傾向>

問題 1

問 1 概して的外れな解答は少なかった。全体を十分によく把握でき、キーポイントになる文や語句を上手く抜き出すことが出来、それを上手く所定の字数に纏めることが出来たかどうか、得点の分かれ目となった。

問 2 未解答の答案はほとんどなく、賛否を含めて自分の意見が述べられていた。ただ、Rachel が苦悩したポイント、“the challenges ahead”（文末）を考察していた答案は極めて少なかった。

問題 2 一部に的外れの英文があったものの、概して問題に対して的確に答えた、良く纏まった英文が多かった。

◆ 外国語学部中国学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題文は、ディスカッションやコミュニケーションの能力を高めるためにはどのような訓練方法があるのかということについて、論述している。問一は、著者の考えを的確にとらえ、指定された字数内で正確な文章で要約する力を見るものである。問二は、高いコミュニケーション能力を有する人材が強く求められている現代社会において、コミュニケーション能力を向上させるためにはどのような方法があるのか、またはどのような努力をする必要があるのかということについて、自身の経験を踏まえ具体例を挙げながら、受験生自らの考えをまとめ表現する力を見るものである。

<答案の特徴と傾向>

問一は、作者の考えを正確に把握しまとめた答案が多く、概ねよくできていた。問二については、設問に対する射的を射た答案が少なかった。受験生自身の経験など具体例を述べるだけで終わってしまい、「必要な訓練とはどのようなものか」という設問に対して自らの考えを表現するに至っていない答案が目立った。そもそも「コミュニケーション能力」または「コミュニケーション」とは何かという根本的な部分を理解していないような記述も少なくなかった。

◆ 外国語学部国際関係学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

この試験では、資料として、農産物貿易について異なる角度から論じた二つの文章を取り上げた。問1では、筆者の主張を的確に読み取り、文章としてまとめあげる力を備えているか確認することをねらいとした。問2では、食糧を自国でまかなう態勢の強化について、二つの資料が提示したメリットとデメリットを認識した上で、自分の考えを明快かつ説得力のある形で提示することが出来るか確かめることをねらいとした。

<答案の特徴と傾向>

問1

問に対して不必要な記述（農産物貿易の自由化ではなく工業製品の自由化）をしている答案が目立った。直接に問に答えていないため、減点の対象となった。

問2

- ・誤字が多い。字が汚い
- ・主張をまとめきらないうちに論を展開している。
- ・前段と後段がつながっていない。
- ・筆者の意見と自分の意見の区別が明確でない記述が多い。
- ・設問文をきちんと見ていないものもあった。
- ・問が設定している状況と異なる状況を想定した解答が目立った。

◆ 経済学部 前期日程（英語・数学）

《英語》

<出題の意図・ねらい>

I

- 問1 第2段落の内容が理解できているか、加えて、makeの訳出が正しくできるかを問う。
- 問2 文脈を理解できているかを問う。
- 問3 英語の基本的な構造が理解できているか、特に、非制限的關係節が理解できているかを問う。
- 問4 数値を表す表現を理解できているかを問う。
- 問5 同格・関係代名詞を理解しているかを問う。

II

- 問1 無生物の主語の構文を理解できているかを問う。
- 問2 第4段落の内容が理解できているかを問う。
- 問3 文脈を理解できているかを問う。
- 問4 英語の基本的な構造が理解できているか、特に、長い主語と比較級をきちんと訳出できるかを問う。

III

与えられた日本語を的確な英語を用いて記述する力を見る。特に語彙や構文の適切さ、文法的な英文を書く力を問う。

IV

与えられた日本語を的確な英語を用いて記述する力を見る。特に語彙や構文の適切さ、文法的な英文を書く力を問う。

<答案の特徴と傾向>

I

- 問1
大半の受験生が“solar system”を正しく「太陽系」と理解しておらず、「太陽光発電」と誤解していた。
- 問2
全体的として正解に近い答案が多かったが、設問に「日本語で具体的に」とあるにも関わらず、言葉足らずな答案も少なからず見られた。
- 問3
比較的よくできているものの、tensionの訳の誤りが多かった。また、“A, which is why B”の構文において、AとBとの間の因果関係を逆に解釈している答案も多かった。
- 問4
概ねよくできていた。
- 問5
同格・関係代名詞については、概ね理解していたが、設問の内容の理解不足の答案が多かった。

II

- 問1
無生物主語の構文であることを十分に理解していないために、和訳された文章が英文の内容からかけ離れている答案や、英文の主語がどこまでかが、理解出来ていない答案が多かった。

問 2

この問いは、筆者の主張の根拠を答える問いで、おおよその内容を理解していると思われる解答は7割程度であった。しかし、単語が適切に訳せていなかったり、主語がない解答が多数あった。

問 3

low-cost airlines や、Skymark Airlines といった誤答が多く見られた。

問 4

accommodation を正しく訳せていない答案が多かった。また、alone を「一人で」と訳している答案も多く見られた。

III

politics と書くべきところを、polite、また、raise children と書くべきところを、grow up children と書いている答案が多かった。また、spread を splred と間違っ綴っている答案も多く見られた。

IV

与えられた日本文の内容が、抽象的だったせいもあり、全体的に出来は良くなかった。「見る」という単語に対して、see/watch という単語を使っている答案が多かった。また、「モノ」を objection と訳している答案も多く見られた。「～すべきである」や、「～しなくてもいい」を適切に英訳している答案は多かったものの、「しっかり」や「きっぱり」を正しく英訳できている答案は少なかった。二つ目の文についても、与えられた日本文を適切に英訳できている答案は少なく、our daily lives で始まるように、英文をうまく組み立てている答案は、半分にも満たなかった。また、our daily lives を our dairy lives と書いている答案も多かった。

《数学》

<出題の意図・ねらい>

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

<答案の特徴と傾向>

問題 1

この問題は、数列の基本的な知識を問う問題でしたが、階差数列の理解を問う(1)や(5)の正答率が予想外に低いものでした。(2)や(4)に関しては、題意をとりちがえて解答しているケースが散見されました。また、後半の(3)、(4)、(5)は、多項式を因数分解しながら正確かつ要領よく計算を進める能力も見ました。しかし、それができていなかった答案がかなり多かったです。

問題 2

(1)は、丁寧に解こうという意図を持った答案が多かったと思います。図を正確に描けば、問題がより整理されてよいと思います。(2)はやや難しい問題でしたが、積分による面積の求め方や接線の方程式を正確に理解していない答案が多かったです。(3)は、(1)で示された範囲を考慮せず、二次方程式の解だけを求める答案が多かったです。全体として、得点は二極化していました。よくできる受験生は満点ですが、まったくできない受験生も多いです。グラフのイメージを正確につかむことが最初からできていない答案が多いです。

問題 3

この問題は、三角関数と図形について考える力を見る問題でした。(1)、(2)は、どちらも基本的な定理を利用する問題でしたのでよくできていました。(3)、(4)は、図形の性質を利用するもの、ベクトルの考え方をを用いるものなど、さまざまな解答が見受けられました。全体的に計算ミスが多く、問題を正確に読み取れていないのか、不正確な図を使って解答している答案が見受けられました。

問題 4

この問題は、確率(小問(1)・(3)・(4))と期待値(小問(2))の定義を状況に合わせて効率的に運用できる能力を見るものです。特徴的な答案は以下のようなものです。すなわち、力任せにすべての場合を書きだした上で該当する場合を数え上げようとするものの、膨大な場合の数にめぐり合ってしまう答案です。あるいは、定義そのままに計算しようとして膨大な計算量にめぐり合ってしまう答案です。あるいは、適用すべきでない公式を適用してしまう答案です。その中で、(1)については、結果的に正しい答に到着できた人が多かったです。(3)は一部の答案が正解し、(2)と(4)は正解率が高くありませんでした。一方でいずれの小問も、論理的に状況を整理してから解けば短い時間でかなり簡単に解けるようにできていますし、実際にそのようなアプローチで美しく解答した受験生もおられました

◆ 経済学部 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

論理的な文章を正確に把握する力があるか否か、自分の主張を論理的に展開できるか否かを見るのが出題の狙いである。問1は内容が適切に把握できているか否かを問う問題である。問2は問題文を参考にしながら、自分の主張を説得的に述べることができるか否かを見ようとしたものである。

<答案の特徴と傾向>

問1 全体として内容を正確に把握している答案が多かった。ただ、「2つの言語コード」の説明に多くの字数を費やし、「2つの言語コード」と学業の関係の説明が不十分な答案もまま見られた。

問2 ①説得的に自分の主張を行った答案は少なかった。なぜ家庭の役割が重要なのかを問うているのに、その説明のない答案が目立った。また、論旨が明確でない答案も多い。②問1も含め、作文の基本的ルールをわきまえない答案がまま見られたし、誤字・脱字もかなりあった。

◆ 文学部比較文化学科 前期日程（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

問題Ⅰ 英語

異文化理解に関する問題文をとおして、基礎的な英語の語彙力、文法力、読解力、および日本語の表現力を問うた。

問題Ⅱ 総合

平易な日本語の英語訳を課すことにより、基礎的な英語の語彙力、文法力、英文の構成能力を問うた。

問題Ⅲ 現代文（論理的文章）

詩の鑑賞文を基本とした詩論より出題。筆者の説明にそって作品（詩）を理解し、また筆者がもっとも主張したいことを論の展開から把握することができるかどうかを問うことを目指し選文した。

問一 筆者の説明をもとに、詩の解釈を示すことができるかどうかを問うた。「春＝希望」という基礎的な読み取りはもちろんのこと、さらにそれを詩という具体的な表現にそくして、自身のことばで説明しなおすことができるかどうかといった表現力をためすものとなっている。

問二 筆者がもっとも主張したいことを読み取ることができるかどうかを問うた。設問は、傍線部を切り口に、筆者が理想とする「詩」を考えるものであり、傍線部の前後を答えるだけでは、解答の一部にしかならない。筆者が考えている「詩」がどのようなものか、文章の冒頭から順に、ときには反復されて示されているので、そのポイントをおさえ、まとめあげる筆力が必要となる問題になっている。

問題Ⅳ 国語表現に関する問題

問一 漢字書き取り問題。平成 22 年度に文科省より示された新常用漢字に対応し、そこから出題している。日常的に用いる漢字を、正確に書くことができるかどうかを問うた。

問二 慣用表現の問題。これも日常的によく用いられるものから出題し、言葉への関心の度合いを問うた。

問三 副詞を用いた作文の問題。「副詞」「単文」など、高校生までに学ぶ日本語文法の基礎事項が理解できているかどうかを重視した。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問 1 正答率は高かった。

問 2 “observer”を「研究者」、「impression」を「感銘」と訳すなど、単語の訳し間違いが見られた。また、特にふたつ目の理由が説明できていない答案が目立った。

問 3 「Both kinds」とは、「positive」及び「negative」なステレオタイプを指している。ところが、ネガティブなものとして挙げられているケニア人と中国人の 2 例とするものが多かった。「stereotype」は「ステレオタイプ」と音訳する例が多かったものの、「偏見」「古い考え」と訳出する例もあった。「they are ...partly true at best」の個所で、「they」は二つの種類のステレオタイプを指しているのだが、「彼らは」と人扱いする誤訳が目立ち、また「partly true at best」を「最も部分的な真実」「一番良い真実の一部」などとする訳例も少なくなかった。文章訳出順序の問題として、理由説明の後半個所「because...」から訳出を行っているため人称代名詞「they（彼ら、それら）」が何を指しているのか不明なままになっている例もあった。ほぼ正解に近い訳出例は 2 割弱だった。

問 4 正答率は高かった。

問 5 both が本文中の Both customs を指していることが理解できていない答案が 2 割程度あった。それが分かっている場合は、たいていしっかり答えられていた。customs の意味を知らない答案が目立った。

問6 for experience and knowledge が to reinforce ~ の意味上の主語であることを意識して解答できている受験生は1割強であった。実力が問えた良問であったと言える。

問7 効果的な異文化間の意味疎通にとって重要なのは、二つのことを自覚すること。すなわち物事を一般化する有用性。そして一般化された物事を個別の場合に照らして修正しうる姿勢をもつこと。これにそって異文化交流における効率的な発信者とはどのようなタイプの人かを説明します。Soundness は「音」と勘違いした答案が多く見られた。また willingness の意味が不明なために、回答そのものが意味不明なものとなった。

問題II

日本語を理解した上でそれをどのような英語に置き換えるかを構想する作業は概ね出来ているようであったが、実際に英文を作成する際に、語彙力の不足や文法の理解不足で誤った英文を作成してしまう例が目立った。

問題III

問一 筆者の提示する「読み方」にそって、詩そのものを解釈しなおすという問題であった。「春＝希望」という本文中の説明に終始してしまうものが多く、それをもちいて、「旅のをはり」や「かもめ」が「浮きつつ」ある様子、そこから「遠く」へいってしまう状況を具体的に解釈することができているものが、高得点となった。

問二 傍線部の直後にふまえるべき点があることに気付くとともに、文章全体を見渡して解答をつくることが求められる問題であった。両方を満たしつつ、的確に文意を論理的にとらえることができている解答は少なかった。

問題IV

問一 「錠剤」「紛糾」の「糾」、「敏腕」の「腕」に間違いが多かった。「往診」を応診と間違える答案も多かった。

問二 全体的に出来が良くなかった。とりわけ③⑤の正答率が低かった。

問三ポイントは「副詞」と「単文」。出来不出来がはっきり分かれた。

◆ 文学部人間関係学科 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

出典は、オランダで組織行動などを研究するヘールト・ホフステード (Geert Hofstede) によって書かれた “Cultures and Organizations: Software of the mind” である。アメリカ企業の面接者と入社を志望する著者とのやりとりや、教育場面における例を取り上げる中で、“masculinity” と “femininity” という次元を仮定することによって文化の違いを整理できる、という文章の意図を正しく読み取ることができたか、また、これらの次元を取り入れながら日本の教育の過去、現在、未来を論じるという課題によって、自分の考えを新たな枠組みを用いて再構成し、文章化するという能力を問うた。

問1

下線部の前後の内容を正しく理解しなければ解答できない問いである。英文の読解能力を測るとともに、文化の違いが個人の行動傾向や人間関係にどのような影響を与えているかに気づいてもらいたい。

問2

英単語のもともとの意味を知っているか否かではなく、当該の単語が文章内でどのような意味で用いられているかを問うている。下線以降の内容を2つの概念に沿って抽象的に要約する必要がある。

問3

まずは、教育の場を学校内に限定せず、それを取り巻く社会という背景を含めて広い視点からとらえてほしい。また、自分が知っている今の学校だけにとらわれることなく、1970年代の日本の社会と、現在、未来という時間軸に沿って、社会の変化に対応して教育も変わり得るものという前提が欠かせない。さらに、“masculinity”と“femininity”という次元を生物学的な男女と混同せずに理解し、教育現場に関する議論に組み込んで解答するよう求めた。

<答案の特徴と傾向>

英文読解力が問われた問題である。英文にある幾つかのポイントを理解しないまま、問いとは違った視点から全体を構成した解答が見られた。また、終始、問いとはかかわりのない持論のみで記述されていたものもあった。特に“masculinity”と“femininity”の誤訳や解釈のミスが小論文における論述の拙さにつながっていたが、その一方で英文全体の主張を的確に捉えられている解答もあった。

論述内容が設問に対応しているかについては、学校教育だけ言及しているもの、社会状況を踏まえることができていない解答が多く見られた。また、現在の問題には言及しているが、1970年代や未来の社会状況と関わらせて記述されているものはほとんどなかった。

◆ 文学部比較文化学科 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

本文は、文化人類学者の青木保氏の著書『多文化世界』の第1章1「文化とは対立するものなのか」の一部です。その内容は、文化的な差異を強調して人種の差と結びつけ、文化が差別の道具となる理論とその事例を紹介し、自文化のアイデンティティ主張の難しさを論じています。もっとも、著者はこうした否定的な文化側面（文化的な対立事例）を肯定的に捉えている訳ではなく、その不条理を指摘しています。

出題のねらいは、第一に文化をどうとらえるかを問うものです。文化は同じ国でも地域間、世代間、職業社会層、男女間で差異が認められます。また文化は遺伝的固定的なものでなく、可変的であり、混合的な特徴があります。そして、文化は本文で紹介されている事例内容とは逆に、肯定すべき側面もあり、異文化に属するグループや人々が互いにその良い文化面を摂取して高め合い、共生し多様性を生み出せる可能性があります。第二に、自らの考えを表現する際の独創性・論理性・論述力を見ることです。

<答案の特徴と傾向>

問1

特定の地域の文化を漠然と外国全般や「欧米」の文化として決めつけている答案があった。問題文の中で紹介されている事例をそのまま引用した答案も一定数あった。

問2

外国人との個人的な交流体験、ホームステイ経験の必要性、幼児期における異文化交流の必要性や漫画を使って各国文化の紹介など、異文化理解のためのプログラム提案をする答案例が一定割合あったが、内容が一

般的で単純化しすぎる傾向が見られた。文化交流を考える際に、日本と外国、日本とアメリカなど国単位での発想と結びつける答案例も一定割合あった。

◆ 文学部人間関係学科 後期日程（集団面接・グループ討論）

<面接の意図・ねらい>

後期日程の試験は、数人の受験生による集団討論に基づいて行われる集団面接である。テーマを設定した討論場面において、自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる力、情報提供や意見調整など円滑なコミュニケーションを進める力、集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける力などを見ていきたいと考える。

なお、討論テーマはあくまでも討論のために設定されたもので、それ以上の意図をもつものではない。

<受験生の特徴と傾向>

身近なテーマとして考えやすい課題は、それぞれの受験生が自身の体験をふまえながら活発に意見を出しており、独創的な意見を持っている受験生も見られた。ただ、討論を通して生じた和やかな空気の中での発言により討論の進行がテーマから少しずれたり、同調性が高く議論として発展しなかったりする場合もあった。

社会事象の原因やその社会的影響を問う課題は、各受験生が意見を出し、その意見に対して質疑することに終始する、分析が浅く発言内容に限られる、他の受験生と同じ発言を繰り返すなど、深い議論がみられなかった。リーダーシップをとる受験生が論点をズレさせている場合もあったが、それを修正できる受験生も居て評価できた。

いま何が議論されているか、議論されている内容がテーマとどのように関連しているかといった視点をもつことや、討論を深める力が期待される。

◆ 法学部 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

【出題文選択の背景】

出典は、鷺田清一『語りきれないこと—危機と傷みの哲学』（角川学芸出版、2012年）であり、出題文は、「言葉の世話 『明日』の臨床哲学」と題する章のなかから、「コミュニケーション・ギャップ」について説明した箇所を抜き出したものである。筆者は、本書の中で、東日本大震災から丸1年過ぎるのを契機に、「震災で、津波で、原発事故で、家族を、職場を、そして故郷を奪われた人たち」の、語っても語っても語りきれない「体の奥で疼いたままの傷」とどのように向き合ったらよいのかを考えるなかで、人と人とのコミュニケーションの難しさについて述べている。その際、ディベートのような、「みなが共有できる観点を見出す」ためのコミュニケーションと、「同じ考えや同じ気持ちになることではなく、たがいの差異をより深く、より細やかに知り、感じていく」対話というコミュニケーションとを区別しながら、「じぶんの考え方、感じ方が変えられていく」対話の重要性について指摘している。確かに、私たちは日常生活の中でコミュニケーションを行っているけれども、どこまで相互理解ができているか心もとない。筆者は、今日、たとえば親と子ども、教師と生徒、医師と患者、さらには専門家同士の間でさえも、コミュニケーションができなくなっている状況を、コミュニケーション・ギャップと呼び、論を展開している。

設問は、家庭の中や学校の中などで言葉を交わしながら、あるいは、さまざまなメディアやツールを駆使して、コミュニケーションを十分行っていると思っている受験生に、筆者の言う「コミュニケーション・ギャップ」の意味がどこまで理解できるか、そして、その「コミュニケーション・ギャップ」という状況にどのように対処しようとするのかについて問うものである。筆者の「コミュニケーション・ギャップ」に関する見解をとらえ、理解し、かつ受験生自身の言葉で自分の考えを論述してもらうことが本出題のねらいである。

【受験生に何を望むのか】

第一に、文章の読解力・理解力が求められる。「コミュニケーション・ギャップ」についての筆者の考えを十分理解したうえで、ポイントをまとめることが必要である。

第二に、筆者の見解をふまえたうえで、「コミュニケーション・ギャップ」を乗り越えるにはどうしたらよいと思うか、自分の考えを論理的・説得的に述べることが求められる。

<答案の特徴と傾向>

設問は、①「コミュニケーション・ギャップ」に関する筆者の主張の把握、並びに②「コミュニケーション・ギャップ」の乗り越え方に関する受験生自身の見解の記述を求めるものである。①については、筆者の主張の論理の構造が捉えられているか、筆者の主張を自分の言葉で的確に表現できているか、「コミュニケーション・ギャップ」に対する筆者の評価、その評価の根底にあるものが把握できているかが問われるが、このような点からみると、不十分な解答が目立った。たとえば、「コミュニケーション・ギャップ」について筆者が言及している箇所を部分的に抜き出すことにとどまっている解答などがその典型例である。筆者の主張が全く把握できていない解答も散見された。

②については、コミュニケーションに対するわれわれの意識の持ち方に焦点を当てるものが多く、「コミュニケーション・ギャップ」を乗り越えるためのシステム、制度、仕組みについて論じる解答は少なかった。なお、設問では、「コミュニケーション・ギャップ」の乗り越え方に関する各自の意見が求められているにもかかわらず、解答の中には、筆者の見解をそのままなぞっているだけのもの、筆者の意見に賛成か反対か

を論じるもの、自分の知っている知識に強引に引き付けて論じる解答などがあり、設問自体に適切に対応していない解答も少なくなかった。

全体としては、①出題文に対する読解の不十分さが目立ち、そのために②「コミュニケーション・ギャップ」の乗り越え方についても論理生や説得性を欠くものが多く、結果として、①出題文の読解が得点を左右する傾向が見られた。

◆ 法学部 後期日程（面接）

<面接の意図とねらい>

法学部では、一般選抜後期日程試験において、面接による選抜試験を実施している。面接を重視している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、目的意識や社会的問題関心などを問うことにより、勉学への意欲と幅広い素養をもった学生を選抜するためである。したがって、面接にあたっては、①受験生の入学意欲や将来の抱負などを含む志望動機、②法学部学生として必要とされる社会科（政治・経済）の基礎的知識と社会的問題関心及び論理的思考力、③面接試験におけるプレゼンテーションのやり方やコミュニケーションの能力などを評価している。

<受験生の特徴と傾向>

前年度と同様に、面接試験では3問が出題された。第1問目は、従来どおり、本学法学部の法律学科または政策科学科を志望した理由についての問いであった。多くの受験生が事前に予測していた質問であったためか、「紋切り型」の回答が多かった。ただ、そうとはいえ、大学のホームページ、オープン・キャンパス、模擬授業などで事前に大学の情報を入手するなど、それなりに積極的に本学のことを知ろうとする姿勢は窺えた。

第2問目は、「政令指定都市」の意味および特徴について、受験生がどれほどの基礎的知識をもっているかを、中高生レベルの教科書などで説明されている範囲内で、受験生に問うものであった。政令指定都市およびその近郊に住んでいる受験生においては、日常的に見聞きしている用語であるにもかかわらず、その言葉の意味内容についてほとんど理解していない者が多かった。また政令指定都市をもたない他県出身の受験生においては、当該用語自体をまったく身近なものとしてイメージされていないなど、全般的に正解率が低かった。

第3問目は、最近の社会問題関心の一つといえる、国政・地方レベルの各種選挙における投票率の低下傾向の原因と対策について、受験生が常日頃どのような関心及び考えをもっているのかを問うものである。全般的に受験生は自分なりの考えを述べ、たとえば、「若者世代の政治的無関心の高まり」、「政治不信」などを原因にあげ、その対処法として「小中学校の早い段階から、選挙制度や投票の権利などについて教育することの大切さ」などを指摘するなど、それなりに的確な回答をしていたように見える。

最後に、多くの受験生において新聞、テレビなどのメディアで発信されている最近の社会的問題に対する関心並びにその知見についてはそれなりの能力は見受けられたものの、社会（政治・経済）の基礎的知識については、残念ながら十分ではなかったように思われる。プレゼンテーションやコミュニケーションの能力の評価以前の問題として、多くの受験生の準備不足、勉強不足が窺えた。

◆ 地域創生学群 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

今回の試験の出題文は、前年度に引き続き地域創生に関連した文章の中から、次の2点を念頭に置きながら選定しました。1点目は、地域創生を考える上で重要な人の生き方に関連した文章であること、2点目は、地域創生を行う上で必要不可欠な社会との関わり方について記述した文章であることです。複数の候補を検討した結果、上田紀行（2005年）『生きる意味』岩波書店、の当該箇所が、上記選定基準に鑑みて最も適当であると判断し、出題文として選定した次第です。

今回の出題文では、「生きる意味」がテーマとなっています。筆者は、出題文全体を通して、現代社会において、自分自身の生きる意味をいかに見出していくか、さらには、一人一人が「生きる意味の創造者となる」社会づくりが求められていると主張しています。これは地域創生に求められる姿勢や心構えにも通じる考え方であり、地域創生学群のいずれのコースを志望する受験生にとってもイメージしやすい内容であると判断しました。

設問では、(1)なぜ「生きる意味」を見出さなければならないのかについて現代社会の状況を踏まえて説明し、さらに、(2)いかに「生きる意味」を見出していくかを「心の時代」における生き方をもとに説明することを求めました。また、当然ですが、論理的思考能力や説得力は解答文全体を通じて評価されることとなります。

<答案の特徴と傾向>

上述の(1)においては、①長い間、日本社会では他者の欲求を生きさせられてきたため、「生きる意味」を与えられることに慣れ、深くまで染みついてしまったこと、②若者に見られるように、他者の目を気にしすぎるあまり、受け入れられやすい自分、すなわち「透明な存在」になってしまったこと、③②の結果として、自分自身がかけがえのない存在だと感じるができない状態、つまり、人間の尊厳が傷つけられ、自尊心が失われた状態であることの3点を明確に述べていることを求めています。

また、(2)においては、④一人一人が生きる意味をどこに定めるかを考える必要があること、⑤自分自身の心に素直になる、または、自分の感じ方を尊重して生きていくことを述べていることを求めています。

答案全体として、(1)の①から③まで全てについて説明している答案は多くなく、いずれかが欠けているものが多く見られました。(2)については、④が書かれていない答案が多くありました。

その一方で、答案の全体の論理的な一貫性を保ち、読みやすくまとめた答案もありました。当然ですが、そのような答案には高い得点がつきました。

最後に、例年のことですが、受験生の意見を求めている設問であるにも関わらず、自分の主張を述べた答案、自分の地域の活動の紹介など、出題文とはほとんど関係のない地域創生に関する事柄について述べている答案も少なくありませんでした。受験生には、本学地域創生学群の小論文の傾向をきちんと踏まえて、入学試験に臨んでほしいと思います。

<面接のポイント>

地域創生学群では、実際の地域に出て様々な活動を行う実習を重視しているため、今年の集団面接では、実際の実習に近い状況を課題として設定し、それに取り組む一連のプロセスに対して評価を行うものとした。

◆ 国際環境工学部 前期日程 (理科・英語・数学)

理科 (物理・化学)

<出題の意図・ねらい>

【第1問～第3問 物理】

第1問

円板上の物体に作用する力を正確に理解し、物体の運動を正しくとらえることができるかを問う。

第2問

理想気体の状態方程式、熱力学の第1法則に関する基礎的な知識と理解を問う。

第3問

直流電源、スイッチ、抵抗、コンデンサーを接続した電気回路に関する基礎問題。合成抵抗、キルヒホッフの法則、直流回路におけるコンデンサーの動作、コンデンサーの静電エネルギー、などの知識と理解を問う。

【第4問～第6問 化学】

第4問

原子の構造と電子配置に関する基礎知識、および、物質中の原子の酸化数や、化学反応による物質間の電子の授受に関する理解度を確認するための問題である。また、酸化還元反応式の量的関係を利用して、物質の濃度を計算する能力を測った。

第5問

酸と塩基のごく基本的な定義を確認する問題である。基礎的な計算力を問う問題や pH に関する理解度を測る内容である。

第6問

有機化合物および有機化学反応の基本的な知識と解答に至るまでの論理的な思考力を問う問題である。

<答案の特徴と傾向>

【第1問～第3問 物理】

第1問

円運動と摩擦を合わせた問題で、状況を正しく理解できていないと思われる答案が多かった。アとウの正解率は高かったが、全問正解は数名で、6割以上が10点未満だった。次元(単位)が合わない答案や、 r と L 、 ω と ω_0 、 μ と μ' を間違えた答案が目立った。

第2問

理想気体の状態方程式を用いて気体の温度を求める問題の正解率は高かった。一方、熱力学の第1法則を用いて熱量を求める問題の正解率は低かった。さらに、エネルギー変換についての問題の正解率は非常に低かった。

第3問

正解率は低かった。比較的正確の答案が多かった問いはセ、ツで、正解の答案が極めて少なかった問いは、チであった。キルヒホッフの法則を適用できていない答案や直流回路におけるコンデンサーの動作を正しく理解していない答案が見られた。

【第4問～第6問 化学】

第4問

問1～問4 基礎的な問題は正答率が高かった。

問5 イオン反応式では、電荷の数を合わせていない誤答が多かった。

問6 モル濃度を計算する問題では、酸化還元反応式の比例式をたてるときに比例関係を逆にしてみよう誤答が非常に多かった。

第5問

基礎的な酸とアルカリの定義に関する問題。

問1 一般的に良くできていた。

問2 数字だけを解答し、単位のない解答が目立った。

問3 正答率が高かった。

問4 計算の途中経過を省略した解が多かった。

問5 $11.2/22.4=0.5\text{mol}$ として良い問題であるが、気体の状態方程式に入れて計算ミスをしている例が見られた。また、“100ml” “電離度 0.010”の取扱をミスしている例が多かった。

第6問

基本的な有機化学の知識と化学量論、気体の法則に関連する基礎的な学力を問う問題である。

問1と問2 正答率は50%程度であったが、全くできないかほぼすべて正解であるかの2極化が見られた。

問3 50%程度の正答率であった。不正解のなかに、化学量論が間違えている解答が目立った。

問4 問1ができていることが前提となる問題であるため、正解率は30%程度であった。ただし、問1で正解しているにもかかわらず、全く異なる解答が書かれている答案が目立った。

英語

<出題の意図・ねらい>

第1問

問1 第2段落の内容が理解できているか、加えて **make** の訳出が正しくできるかを問う。

問2 文脈を理解できているかを問う。

問3 数値を表わす表現を理解できているかを問う。

問4 文脈、特に比較を理解しているかを問う。

問5 同格・関係代名詞を理解しているかを問う。

第2問

問1 無生物主語の構文を理解できているかを問う。

問2 第4段落の内容が理解できているかを問う。

問3 文脈を理解できているかを問う。

第3問

自分の意見を平易な英語を用いて記述する力を見る。特に語彙や構文の適切さ、文法的な英文を書く力を問う。

<答案の特徴・傾向>

全体を通して、記述問題は日本語として意味が通らない解答が多くみられただけでなく、誤字（人件費を人権費、航空を空航など）が大変多かった。また、第2問の問3や第3問のように英語で答えるべき問題に日本語で解答しているものも見られた。

第1問

- 問1 設問の後に続く **That is because...**を踏まえたうえで、**if** 節と主節からなる下線部の内容を問う設問であったが、多くの回答が **because** 以降の訳のみで終わっていた。加えて、「160 キロ上空でロケットを作る」など本文脈での動詞 **make** を理解してない答案や、**the solar system** を太陽光発電と誤認識した答案が非常に多かった。
- 問2 文脈は理解しているようだったが、設問の **it** が指し示す箇所を正確に読み取れていない解答が見られた。この **it** は **the idea of climbing a rope to heaven** (ロープをよじ登って天まで行くという考え) を指すが、「宇宙エレベーターを開発すること」や「宇宙エレベーター」といった誤答が目立った。
- 問3 不正解である「③ **fifty eight thousands**」を選択する答案が多く見られた。日頃より目で見ただけではなく、声に出して読んでいけば、難なく正解にたどり着けたのではないだろうか。
- 問4 内容をきちんと理解できている答案と全く理解できていない答案とに二極化した。特に問題箇所の次のパラグラフに書いてあるカーボン・ナノチューブの内容を書いている答案が散見された。また数字を正しく読み取れていない答案も多く見られた。
- 問5 下線部は直前の **120GPa of tension** との同格であり、**120** ギガパスカルがどのような圧力なのかを説明している。文法的には **which** 以下が関係詞節であり、先行詞である **an amount** を修飾する構造となっている。したがって、この箇所は全体が名詞句になるように訳す必要があるが、文として訳している答案が散見された。関係詞節中の **comfortably** は「快適に」という意味ではなく、差が十分にあることを表す意味になっていることに注意されたい。したがって、当該箇所では、カーボン・ナノチューブの耐久性が宇宙エレベーターのケーブルにかかる圧力を「ゆーに・十分に」上回っていることを示している。

第2問

- 問1 述語動詞として **include** が使われているのは、運賃を下げる措置は本文中で挙げられている2項目以外にもあるからで、それが訳出できている答案はほとんど見られなかった。**a single type of aircraft** を「一人乗り飛行機」、**save on labor costs** を「人件費を貯める」と訳出している解答が目立った。
- 問2 問題箇所と同一パラグラフの "**domestic flights**" を正しく理解できておらず、ヨーロッパの航空会社の話を書いている答案、および、"**airlines**" を正しく「航空会社」と訳出できておらず、「空港」や「飛行機」と誤訳する答案が多く見られた。
- 問3 ここでは、**Skymark Airlines** が競っている相手を答える必要があるが、途中で挿入句などが多く含まれているため、文構造が理解できていないために **Skymark Airlines** や **Japan's first low-cost airline** とした解答が非常に多かった。また、設問は **the newcomer** と名詞の単数形であるにもかかわらず、**airlines** や **Peach now offer flights**、**buying air tickets alone** など、基本的な文法事項が理解できていないと思われる解答も多かった。

第3問

《良かった点》

- ほとんどの受験者が回答に挑戦した（白紙は10人程度）。
- センテンスごとに改行があった答えは多かったとはいえ、基本的なパラグラフ構成に沿った文章が著しく多かった。8割ぐらいの答案は、トピックセンテンス（選択した言語）、サポート（選んだ理

由)と簡単なコンクルージョン(結論)といった書き方を採用していた。

- 簡単な仮定文は(意外と)上手に書けていた。

《悪かった点》

- 最上級の正しい使い方がなかなかできていないこと。“most nearest”や“I most like club team”などのような間違いが多かった。
- 設問は「英語以外の言語」と書かれてあったのにも関わらず、10人程度は英語を選択していたこと。少ないものの、正しく設問文を読んでいないのは残念でならない。
- 接続詞の前に文を分割した答案が多かったこと。“We should master Chinese. Because Japan will become more international.”というような文が頻繁にあった。
- 国名や言語のスペルを間違えた答案、もしくは国の名前と言葉の名前を逆にした答案が5割程いたこと。“Chainese”“Itaria”“Koria”等々がよくあり、“I want to learn Germany”や“I love Spain soccer”のような間違いも顕著だった。
- カタカナ日本語からの悪影響がみられたこと。“I choice French”の“choice”が多かった。英語なら名詞だが、日本語で「チョイス(する)」のように動詞として使うことがあるから、このミスがあったと考えられる。
- 動詞の“learn”を“learn to”とした答案も大変多かった。確かに“I am learning to speak English”というような使い方があるが、「言語を勉強する」という時は、「learn a language」(直接目的語)で良い。

ちなみに、選択された言語を人気の高い順番にすると、中国語がずば抜けて多く、続いて韓国語、フランス語、ドイツ語で、最後にスペイン語とイタリア語がほぼ同数であった。

数 学

<出題の意図・ねらい>

第1問

数学Ⅰ、数学Aに関する基礎的知識を問う。根号を含む式の計算、二次関数、場合の数、三角比、確率に関する問題を出題している。

第2問

複素数の計算、円の軌跡、三角関数、対数関数、数列に関する問題について出題し、数学Ⅱ、数学Bに関する基礎学力を確認する。

第3問

微分法・積分法に関する問題。積分法による体積の算出、導関数の導出、及び導関数を利用した関数の極値、変曲点の導出、グラフ描画を理解しているかを確認する。

第4問

行列に関する問題。ハミルトン・ケーリーの定理や行列の計算、1次変換に関しての理解を確認している。

<答案の特徴・傾向>

第1問

基本的な知識が身につけているかを問う問題であったが、正答率にばらつきが生じた。問題ごとに比較すれば、根号を含む計算式(1)の正答率が低く、確率に関する(5)の正解率もやや低かった。

第2問

基礎力を確認する問題であった。個々の正解率にばらつきがあったものの、全体の正解率は概ね予想通りであった。以下の正解率の高低は、第2問の平均を基準としている。

- (1) 正解率は平均程度であった。計算間違いおよび不注意による誤答が散見された。
- (2) 正解率は最も低かった。空白や見当違いの誤答が多かった。
- (3) 正解率は高かった。
- (4) 正解率は低かった。見当違いの誤答がやや多かった。
- (5) 正解率は最も高かった。

第3問

積分法を応用して体積を求める問題。(1)と(2)はそれ以降の設問への導入であり、正解率は高かった。(3)、(4)、(5)の正解率は低かった。積分区間を三角関数で表すことができたかどうかポイントになった。途中で計算が多少煩雑になるので、受験生としては不安に駆られるかもしれないが、答えは比較的シンプルである。落ち着いて正解にたどり着く実力が欲しい。

第4問

問題全体の正解率は予想どおりであった。ただし、行列の基礎的な操作や演算を理解していない答案も見られた。

- (1) 多くの答案がケーリー・ハミルトンの定理を適用しており、正答率が高かった。
- (2) (1)の結果を活用し、行列多項式を簡単な $aA+bE$ に変換したのちに演算する方法を採用した答案は少なかった。行列の高次べき乗数を直接演算した答案の大半に演算ミスが見られた。
- (3) 正答率は約 50%。変換前の座標と返還後の座標が行列でどのように関係づけられるかを理解していない答案も見られた。

◆ 国際環境工学部 後期日程 (数学)

- 機械システム工学科 (第3問選択A、B、Cの中から2問選択)
- 情報メディア工学科 (選択)
- 環境生命工学科 (選択)

<出題の意図・ねらい>

第1問 (第3問 選択A)

- (1) 絶対値を含む1次不等式に関する基本的な知識を問う問題である。
- (2) 2次関数の最小値に関する基本的な知識と演算能力を問う問題である。
- (3) 三角形とその内接円の面積に関する基本的な演算能力を問う問題である。
- (4) 多次多項式の展開式に関する基本的な演算能力を問う問題である。
- (5) 確率と期待値に関する最も基礎的な知識を問う問題である。

いずれも基礎能力の確認を狙っており、正確かつ迅速に解答することを期待する。

第2問（第3問 選択 B）

ベクトルと平面図形に関する設問である。高度な知識や発想を問う問題ではなく、位置ベクトルに関する基本的な知識と論理的な思考力を確認する問題である。

第3問（第3問 選択 C）

- (1)、(2) 微分に関する基本的な問題である。微分可能な関数に対する理解度と微分係数に関する計算力を考察する。
- (3) 定積分の計算問題であり、指数関数、絶対値のついた関数の積分に関する計算力を考察する。
- (4) 関数の最小値を求める問題である。関数の導関数、関数の増減、極値、最小値に対する理解度と計算力を考察する。

<答案の特徴と傾向>

第1問（第3問 選択 A）

基本的な問題である問題(2)、(3)、(4)は、正解率が高かった。

問題(5)は比較的正解率が低く、問題(1)の正解率が低かった。

第2問（第3問 選択 B）

位置ベクトルやベクトル方程式などの基礎事項の理解度は高かったが、求めた線分の内分比から論理的に面積比を導き出せた答えは予想よりも少なかった。

第3問（第3問 選択 C）

- (1) 微分の基本問題であり正解率が高かった。
- (2) 連続関数と微分可能な関数に関する問題で、微分可能な関数の性質を活用していない解答が多かった。
- (3) 絶対値関数に関する積分問題で、関数値の正負にしたがって積分区間を定める計算ミスと部分積分計算ミスが目立った。
- (4) 導関数を用いて関数の増減性を考察し、関数の最小問題を求める問題で、関数の定義域を考慮していないミスがあり、正解率がやや低かった。

◆ 国際環境工学部 後期日程（物理）

■機械システム工学科（第1問、第2問）

■情報メディア工学科（選択）

■環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

【第1問～第3問 物理】

第1問

問1 滑車につながれた物体の運動を正しく求めることができるかを問う。

問2 液体中の物体に働く力と、それによって生じる単振動が理解できるかを問う。

第2問

熱量、内部エネルギー、仕事の関係（熱力学の第1法則）に関する基礎的な問題である。また、サイクルや熱効率に関する知識と理解についても問う。

第3問

電気回路に関する基礎問題。オームの法則、合成抵抗、キルヒホッフの法則、合成容量、電気量保存の法則、直流回路におけるコイルの動作、コイルに蓄えられるエネルギーなどの知識と理解を問う。

<答案の特徴と傾向>

【第1問～第3問 物理】

第1問

問1は、アの正解率は高く、満点も多かった。一方で、アを間違え、0点の答案も同じ程度あった。出来、不出来が分かれた。

問2は、カ～クの正解率は高かったが、ケとコの正解率は低かった。このため、得点が30点の答案が非常に多く、満点は少なかった。

第2問

内部エネルギーについての問題の正解率は比較的高かった。熱量と仕事との関係（熱力学の第1法則）についての問題の正解率は低かった。サイクルの熱効率についての問題の正解率はさらに低かった。

第3問

比較的良好に正解しており、満点の答案も散見された。計算間違い問題をよく読んでいないと見られる答案が多かった。

◆ 国際環境工学部 後期日程（化学）

■ エネルギー循環化学科

■ 環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

問1 炭素原子を課題対象として種々の化学の基礎知識を問う内容である。

問2 酸化還元反応の基礎知識、および酸化還元滴定の実験操作で考察すべき事象を問う内容である。

問3 硝酸合成、アンモニア合成を対象とし、化学反応の応用展開に関する考え方を問う内容である。

第2問

酢酸水溶液の水酸化ナトリウム水溶液による中和滴定を題材に、酸塩基平衡とpHなどの化学的知識を問う問題である。

問1 中和滴定および酸塩基平衡の学術用語の基礎知識を問う問題である。

問2 酢酸の酸解離平衡における電離定数（酸解離定数）と電離度の関係式から、濃度と電離度との定性的な関係を問う問題である。

問3 弱酸の緩衝作用の原理について問う問題である。

問4 酢酸水溶液中の酢酸の濃度を計算する問題である。

問5 酸解離平衡における電離度と濃度の関係から水溶液中のpHと電離定数や濃度との関係式を導出する問題である。

問6 問5で導出された式を用いて、酢酸の電離度を計算する問題である。

第3問

熱量保存の法則の理解を問う基本的な問題である。

問1 炭化水素の燃焼の化学式であり基礎的な問題である。

問2 燃焼熱の定義を問う問題であり、これも基礎的な問題である。

問 3 同上。

問 4 結合熱と燃焼熱をエネルギー保存則から問うのは教科書の範囲からやや外れるが、参考図をヒントにすれば範囲内の燃焼熱の問題と同じであり、連立方程式を立てれば良いことに気付くはずである。

問 5 上記の問題を解くことができれば容易である。

<答案の特徴と傾向>

第 1 問

帰納的な問題に対しては正答率が高いものの、演繹的な問題に対しては極端に不出来に差が現れた。例えば、ある物質の結合は何かには正答を得られるが、同じ結合を持つ物質の選択では正答を得られない。また、A と B の化学反応の反応式は書けるが、A は C になってから B と反応する反応式になると正答が導けない。

文章量が多い問題は避ける、または文章を一つ一つ丁寧に読み解くことをしない傾向にあった。問 2 では、問題文に沿って順次計算式を解けば自動的に正答に繋がる内容になっているが、その分、文章量が多くなっている。ほとんど白紙の解答用紙や問題とは関係ない思いつきやすい式の記入が多く、正答率は極端に低かった。問 3 の二段階の化学反応式を用いた計算でも同様であった。

第 2 問

問 1 語句問題は正答率が高かった。

問 2 問 5 および問 6 との関連問題であり、問 2 の電離度 α が導けていれば、問 5 と問 6 も正解している傾向にあった。

問 3 弱酸の緩衝作用の原理について、酸側からの緩衝と塩基側からの緩衝のどちらかを説明している解答が散見された。

問 4 酢酸の濃度計算問題は正答率が高かった。

第 3 問

燃焼の化学反応から結合エネルギーを問う問題である。

問 1 燃焼の反応式であり、ほとんどが正解であった。

問 2 完全燃焼の定義を正確に理解しているかを問う問題であった。以外に完全正解が少なかった。

問 3 熱化学方程式から、結合エネルギーを求める問題である。ヒントとなる図が示してあり、1割程度が完全正解であった。この問題で差がついたと思われる。

問 4 問 3 ができれば容易である。

問 5 問 3 で得られた式に問 4 で得られた値を入れて計算するので、両問いの正答率の影響を受けた。

◆ 国際環境工学部 後期日程 (生物)

■ 環境生命工学科 (選択)

<出題の意図・ねらい>

第 1 問

DNA の構造と役割および DNA の切断や複製にかかわる酵素を題材に、生物の基本知識の理解を問うとともに、近年注目されるバイオテクノロジーの原理や手法についての理解度を問う問題である。

第 2 問

呼吸商に関する問題である。問 1~3 は呼吸商の意味を正しく理解しているかを問う問題である。問 4 は

呼吸商を理解した上での応用を見る問題である。問 1～3 は複数の教科書の例題に準拠した内容であるので確実に回答して欲しい。

第3問

植物の組織培養を題材に、細胞の構造や植物ホルモンの役割についての知識を問う問題である。また、植物細胞からプロトプラスト細胞を調整するなど、植物の細胞工学に関する原理や手法についての理解度を問う問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1 DNAの構造と遺伝子組換えに関する基本的な知識を問う問題であり、良くできていた。

問2 酵素名に関する基本的な知識を問う問題であり、良くできていた。

問3 ヌクレオチド間の結合に関する理解を問う問題であったが、正解が少なかった。

問4 概ね高い正答率であった。

問5 PCRの反応条件を考えれば導き出せる解答であるが、半分程度の正答率であった。

問6 PCRにおけるDNAの変性、プライマーの結合、合成の過程を問う問題であったが、反応の順番が異なる解答や遺伝子組換えの手順を説明している解答などが目立った。

第2問

問1は、呼吸に関与する細胞小器官と呼吸の過程でつくられる物質についての問題であり、正答率は高かった。一方、問2以降は呼吸商に関する設問であるが、正答率が高いとは言えなかった。具体的には、呼吸商の概念を理解していない解答が散見され、得られた呼吸商の数字が正しくても、反応式の記載が不正確であったり、逆に反応式を正しくかけてもどのように計算すべきかを理解していない答案が多く見受けられた。

第3問

バイオテクノロジーの基礎的な知識を問うものであったが、全問をとおして概ね正答率が高かった。問3と問4はプロトプラストに関する問題であったが、発展的な問題であったためか、やや理解度が低かった。問6の新しい雑種を問う問題には種々の珍解答もみられた。

◆ 国際環境工学部 後期日程（面接）

■ 建築デザイン学科

<面接の意図・ねらい>

はじめに4～5名を1グループにして20分程度のグループ面接を行った。

- ・高層建築の多い都市と低層建築の多い都市のどちらに住みたいかという質問
- ・他者への意見に関する質問

などに対し、回答を求めた。

次に10分程度の個別面接・口頭試問を行った。

- ・自己アピールおよびその内容に関する質問
- ・節電方法と、その中で最も効果的な方法およびその理由
- ・本学に入学した場合に学びたいことや、卒業後の進路

<受験生の特徴と傾向>

グループ面接では、自分の意見は例年よりも良く話している印象が見受けられたものの、他者の意見に対する自分の意見が例年よりも少なく感じた。個人面接では、節電方法について様々な回答があった。自分の身の回りの節電方法(電気をこまめに切る、エアコンの設定温度を冬は低めにするなど)が多かったが、技術的な節電方法(太陽光発電の設置、LEDの設置など)を挙げる回答もみられた。

平成 25 年度入試の出題の意図、採点総評 《推薦入試》

◆ 外国語学部英米学科 推薦入試（全国：面接）（地域：小論文）

I 全国推薦

<出題の意図・ねらい>

<傾向>

すべての受験生がかなり高いレベルでの受け応えをすることができた。

中には難易度の高い内容の質問もあったにもかかわらず、ほとんどの学生が質問の意図を正しく聞き取り、ほぼ正確に応答することができた。ほぼ全ての受験生が面接官が期待したレベルに達していた。

II 地域推薦

<出題の意図・ねらい>

日頃でも話題にすることのある内容を題材に取り上げて、日頃の英語の勉強内容を着実にこなしていけばわかるような問題になっている。具体的には、要約に関しては、文中のキーワードを踏まえて内容が理解できているか、日本語訳では、英語の文型についての学習ができているか、英語訳では文中の言葉を利用して自分の意見を簡潔に構成できるかをみることを目的としている。

<答案の特徴と傾向>

- 問1 日本語の要約に関しては、「精神的な満足感」と「物質的な満足感」との対照をテーマに議論がされていることに絞れるかで答案に差が出た。高い得点の答案では、お金・富等か得られる充足感でなく他人への配慮・分け隔てのなさを充実させることを明確に指摘している。
- 問2 三つある文の内、最初の文について出来てなかった。また、日本語訳についても見直すと文法的に的確な表現になる答案が多かった。残りの二文についてはできていた。斜字体の表現の背後にある作者の意図を反映した日本語訳は見られなかった。
- 問3 おしなべてよく出来ていた。満点も多かった。community の訳し方が荒っぽい受験者が何人かいた。
- 問4 多くの受験生が自分の考えをしっかりと述べている一方で、その組み立て方についてまとまっていない答案も散見された。使用する英語の語彙が少ないためにか、同じ内容を繰り返した答案もあった。

◆ 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題文は東日本大震災時の日本人の行動を文化的な観点から考察した英文であり、資料①はドイツにおける移民政策を、資料②は報道のあり方を論じた新聞記事である。問1では、英文による筆者の主張を正確に読み取れるかどうかを確かめた。問2では、問題文と資料が扱う複数の論点を整理し、問いに対する見解を的確にまとめる力を見ることにした。

<答案の特徴と傾向>

問1

英語による文章を指定の字数で要約する問題であった。英文は平易であるが、議論の進め方にやや複雑な箇所があったため、論旨を正確に把握できず、不十分な内容になっている解答が多かった。問題文・資料全体を読みこなす力が問われているが、英単語の意味を取り違え、要約に破綻をきたす例も目立った。また、結論まで十分に訳しきれなかった解答も見られた。

問2

問題文と資料をすべて活用し、異文化理解を妨げているもの、それを乗り越えるためにすべきことを問うた。資料から文化の違いそのものと異文化を理解するためのツールにかかわる問題が読み取れるが、こうした点に言及した答えはさほど多くなかった。その一方で資料を丸写ししたものや叙述が断片的で論理的一貫性を欠く解答、移民問題だけに言及した解答が目立った。また、時間切れで最後まで論じきれなかったものや誤字・脱字も散見された。

◆ 経済学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

設問 1

- ・経済をテーマとする比較的長い文章を読んで、その内容が十分に理解・把握できていること。
- ・主要な論点が理解できており、それらを短い文章に要領よく纏めることができること。

設問 2

- ・経済をテーマとする比較的長い文章を読んだうえで、自分なりの主張・考えを論理的に展開できること。
- ・文章の構成や組み立てがきちんとできていること。

<答案の特徴と傾向>

- ・特に設問 2 について顕著であるが、設問を一切無視し、自分で予め用意しておいた解答内容に近づけようと、所得格差、非正規労働者、グローバル化の問題などに論点がずれてしまった答案が数多く見られた。
- ・受験生の文章の巧拙にかなりの差がみられる。
- ・誤字・脱字が多くみられる。

◆ 文学部比較文化学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題Ⅰ

問1

問題文の筆者が、世界における犯罪率の減少、戦争の防止、民主主義の進展の3点についてそれぞれ述べている箇所を特定することがまず求められるが、この作業はさほど困難ではないと思われる。この問いが要求しているのは、それぞれの箇所を正しく把握し、その上で100字という制限の中で要約できるような英文の理解力と日本語文章能力である。

問2

問題文を通じて筆者は、世界情勢についていたずらに悲観的になる必要はないという、多少変わった見解を述べている。過度に楽観的になることが持つネガティブな側面を認めつつ、人々は根拠もなく悲観的になりがちであり、楽観視できるような材料を見過ごすことが多いというような考えは、現在においては新鮮な見解かもしれない。そうした独特の見解を文章に即して適切に理解し、こなれた日本語に要約してほしい。

問3

ここでは、問題文の中でも筆者がある程度までは楽観論の限界を認めているような箇所を取り上げて、それに対する個々人の考えを問うている。問2もふまえて、環境問題についても、筆者のような楽観的な態度を取り続けることがはたして正しいのかどうかを、よく考えてもらいたい。その上で自分自身の考えを具体化するための方策をまとめ、それを英語でどこまで適切に表現できるかが、評価の対象となる。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問1

要約すべき箇所を特定することができなかった答案はなかったが、文章の内容自体を把握できていない答案が多く、筆者の主張とは正反対に文章を理解している答案すらあった。また、基本的な日本語の表現においても間違いが散見された。

問2

Pangloss 流の無責任な楽観主義でもなく、地球温暖化に対する悲観主義でもなく、人類の文明進展の歴史を合理的根拠にすえた希望の（楽観主義的な）第三の道という構図の全てを描けている学生はいなかった。よって満点は無し。ただし、8割ほど得点できている学生はちらほら散見された。

問3

筆者の考えや主張を繰り返すだけで、自分の意見を展開できていない答案が多く見られた。また簡単な単語や英文法の間違いも目立った。

問題Ⅱ

問1

「曲り角」という語の意義を正確に読み取っているか尋ねたものだが、それを七五調・五七調の衰退のみについて述べた答案が目についた。それは「起」であり論の入り口である。問題文全体をよく読んでいないということであり減点した。

問2

「曲り角」の具体例を挙げていないものや食生活など日本語以外の日本文化の「曲り角」について論じた

もの、また是非に関して玉虫色の評価が目立った。

◆ 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

化石燃料に頼ってきた私たちの暮らしを振り返り、現代社会を生きる一員として、これからのエネルギー資源の利用・開発と環境保全のあり方について考える契機とする。

【採点について】

- 問1 下線部分に関しての適切な理解と共に、それに即した問題点の抽出ができているか。
問2 下線部分に関して筆者が予想している部分の英文を正確に抽出し、適切な訳ができているか。
問3 妥当性、独創性、論理構成、文章表現力（各6点、合計24点）について評価する。

<答案の特徴と傾向>

問1

問1で指示する下線部分を読んでその問題点を指摘するためには、英文全体を理解しておく必要がある。しかし下線部分の直訳に終始し、問題点の指摘にまで至っていない解答が多くみられた。なおかつ正確とはいえない直訳も多くあり、英文の読解力が求められる。

少数ながら英文全体を理解し、問題点を数点にわたって指摘する解答もあった。

問2

多くの解答は問2で指示する英文の直訳に終始している。しかも正確とはいえない直訳も多く見受けられた。

下線部分を回答するためにはある程度、現在の日本の社会情勢に関する知識も必要であるが、問題文であるの日本語を読み合わせて考察するだけでも十分に解答できるはずである。ごくわずかではあるが、問題文全体を読み込み、下線部分について良くまとめた解答もあった。

問3

文章1と文章2の内容を把握し、自らの主張を整理して記述することを求めた設問である。しかしながら、問題文の内容を十分把握しないままに記述し、論点が整理できていないため、主張に論理性や一貫性がない解答が多く見受けられた。

私たちの生活がどのように成り立っているのかについての社会的関心を持ち、新聞等で知識を身につけていることも求められている。

◆ 法学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

【出題文選択の背景】

出典は、梶井厚志『コトバの戦略的思考 ゲーム理論で読み解く「気になる日本語」』（ダイヤモンド社、2010年）であり、出題文は、「日常コトバ編」と題する章のなかから、「横並び」について説明した箇所を抜き出したものである。筆者は、本来「物が横に並んだ状態にあること」、またそこから転じて「差をつけなくて同等に人を扱うこと、あるいはそのように扱われている状態」を指すこの言葉には、「指し示す物事が好ましくない状態にあるということ」という新たな含意があり、「何か悪いことを暗示すべく使われるもの」であると指摘したうえで、「横並び」のもつ特殊な意味合いから、モラル・ハザード問題や成果報酬システム、セーフティ・ネットについて、論を展開していく。

設問は、「横並び」という言葉の意味合いと、出題文中でのモラル・ハザード問題との関係について、受験生が筆者の見解を要約したうえで、日本の社会経済システムにおいて、モラル・ハザード問題が起きないようにするためにはどうすべきか、ということ进行を問うものである。一見、なんでもない身近な言葉である「横並び」の含意や、そこから展開される経済学的なモラル・ハザード理論、成果報酬システムといった内容は、受験生にとってはやや入り込みにくい題材であるかもしれないが、法律や政策を学ぶにあたり、これらは重要な概念であり、避けて通ることはできない現代社会の課題について、解決策を示すひとつの視座である。先入観なく筆者の見解をとらえ、理解し、かつ受験生自身の言葉で自分の考えを論述してもらうことが本出題のねらいである。

【受験生に何を望むのか】

第一に、文章の読解力・理解力が求められる。筆者のいう「横並び」の意味合いとモラル・ハザード問題との関係について、その見解や問題意識を十分理解したうえで、ポイントをまとめることが必要である。

第二に、筆者の見解をふまえたうえで、モラル・ハザード問題が起きないようにするためにどうすればよいか、自分の考えを論理的・説得的に述べることが求められる。

<答案の特徴と傾向>

設問では、筆者の言う「横並び」の意味合いとモラル・ハザード問題との関係についての要約に加え、モラル・ハザード問題が起きないようにするためにはどうすればよいか、受験生の考えを述べることを求めている。要約の部分では、簡潔にまとめられていない答案が目立った。また長い割には「横並び」の意味合いについての筆者の見解の趣旨が読み取れていない解答や、モラル・ハザード問題との関係について触れていないものも散見された。

受験生の考えを述べる部分に関しては、課題文中にある筆者の考えや例示につられているのか、自分の考えを述べるという記述にまで至っていない答案が多かった。課題文をふまえて独創的な意見を論理的に示す説得力ある解答もあったが、数は少なく、多くは筆者の考えをまとめたにすぎない解答、筆者の見解に対する賛否のみを記した解答、過去問に引き摺られている解答、事前に準備してきたと思われる答案を今回の設問に無理やり関連させようとしている解答であった。解答の前半部分である要約に字数を費やし、自分の考えを書くスペースがなかったと見受けられる答案もあった。

答案の書き方の基本ができていない解答が見られたことにも注意しておきたい。小論文の基本、たとえば主語・述語の関係、句読点の位置について、不適切な表記が目立ったのは残念である。口語的な表現、誤字脱字もしばしば見受けられたが、基本中の基本として、正しい文章の書き方、正しい漢字をしっかりと身につけたうえで受験に臨みたい。

◆ 国際環境工学部エネルギー循環化学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問

水質の代表的な指標である COD を例に取り、酸化還元反応、金属の反応、実験の基礎知識などを理解していることを確認するとともに、環境に対する基礎知識に基づく応用力や日本語読解力を確認する。

第2問

問1 原子の構造に関する基礎知識を有しているかを問う問題である。

問2 水溶液の濃度に関する基礎知識を問う問題である。質量パーセント濃度は硫酸銅(II)無水物をもとにした濃度であることに注意が必要である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1および問3は、簡単な計算であるが、計算間違いや単位の換算での間違いが多かった。問2および問4の正解率は低く、特に問5の正解率は10%未満であった。問5では、富栄養化の原因（原因は、窒素およびリンであり、有機化合物ではない）と答えた解答が多かった。

全体を通して言えることは、基本の理解が不十分なことである。基本をしっかりと理解させることが、応用にもつながるはずである。

第2問

問1 おおよそ正答であった。質量数と原子量、同位体と同素体を間違っている解答が一部見受けられた。

問2 正答はほとんど見られなかった。特に、濃度に関する基本的概念の理解が全くなされていない答案がほとんどであった。化学の基本的概念に対する理解力の向上が強く求められる

面接

<面接内容>

本学への志望動機、就学意欲、将来の進路、学力（得意科目など）を最初にプレゼンさせた。その後、基礎的な化学の知識、環境用語に関する質問、時事問題に関する質問を行い、基礎学力、意欲、コミュニケーション能力等の項目について評価した。

<受験生の特徴と傾向>

最初のプレゼンでは環境への意識や修学意識は総じて高かった。一方で、基礎的な化学の知識については、完全な解答をした生徒は皆無で学力には不安が残った。また、簡単な環境用語や時事問題などにも質問の意図と異なる解答をする生徒も多く、コミュニケーション能力に問題があると思われた。学力については特に優秀な生徒はいなかったため、コミュニケーション能力で得点に差がついた。

◆ 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

工学の基礎である数学を大学で学ぶために、最低限必要な基礎学力を確認するための基本的な問題。

第2問（数学）

ベクトルを応用して解く図形の問題を出題した。解く過程がきちんと論理的に記述され計算も正しくできているかを見た。

第3問（物理）

問1 物体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 ドップラー効果および音のうなりの基礎的な内容を確認する問題とした。

問3 直流回路の基礎、オームの法則の基礎を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

どの問題も正答率が高いとはいえない結果であった。大学で学ぶことを望むのであれば、このレベルの数学は完全にマスターしてほしい。受験生には十分な復習を期待したい。

第2問（数学）

答案は良くできているか、ほとんどできていないかのどちらかという傾向である。できている答案の中で、覚えている特別な公式をそのまま利用し、答えを出しているものが目立った。特別な公式を使うことなく、ベクトルを理解しそれを応用して論理的な手順と、正しい計算で正答を導くことができるが、そのような答案はそれほど多くなかった。

第3問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の第2法則について問う問題であるが、いずれの法則も理解していない解答が目立ち、正答率は低かった。

問2 音源と観測者、それぞれが移動する場合のドップラー効果および音のうなりの関係を問う問題であったが、概ね高い正答率であった。

問3 直流回路の電圧降下、消費電力についての問題は高い正答率であったが、抵抗の直列・並列接続とオームの法則を問う問題では誤答が目立った。

面接

<面接の形態>

受験生17名に対し、1人8分程度の個人面接を実施した。

<面接内容と意図>

(1)志望理由等に関する質問

機械システム工学科を志望する動機、将来の進路などについて質問し、学科についての理解度、機械工学への学習意欲、学科への適合性などを見極める。さらに、コミュニケーション能力を確認する。

(2)物理と数学に関する質問（口頭試問）

機械工学を学ぶ上で不可欠な基礎学力（物理、数学）の理解度とその表現力を確認する。

<受験生の特徴と傾向>

志望動機に関しては、指示した時間で説明できる受験生が多かった。学科の教育方針に沿った「ものづくり」、「環境問題」などに関連させた返答や、教員の研究分野に興味を持っているといった返答が多く、事前に学科について調べていることが伺えた。また、将来の目標などの質問を通して、機械工学への適合性を評価できた。

物理と数学の基礎的質問に対しては、緊張のためか回答できなかった生徒も多く、大きな点数の差となって表れた。物理の問題では、種々の法則や現象に対して、ただ数式を丸暗記しているのではなく、理解して表現できることが必要である。

◆ 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

工学の基礎である数学を大学で学ぶために、最低限必要な基礎学力を確認するための基本的な問題。

第2問（数学）

ベクトルを応用して解く図形の問題を出題した。解く過程がきちんと論理的に記述され計算も正しくできているかを見た。

第3問（物理）

問1 物体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 ドップラー効果および音のうなりの基礎的な内容を確認する問題とした。

問3 直流回路の基礎、オームの法則の基礎を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

どの問題も正答率が高いとはいえない結果であった。大学で学ぶことを望むのであれば、このレベルの数学は完全にマスターしてほしい。受験生には十分な復習を期待したい。

第2問（数学）

答案は良くできているか、ほとんどできていないかのどちらかという傾向である。できている答案の中で、覚えている特別な公式をそのまま利用し、答えを出しているものが目立った。特別な公式を使うことなく、ベクトルを理解しそれを応用して論理的な手順と、正しい計算で正答を導くことができるが、そのような答案はそれほど多くなかった。

第3問（物理）

- 問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の第2法則について問う問題であるが、いずれの法則も理解していない解答が目立ち、正答率は低かった。
- 問2 音源と観測者、それぞれが移動する場合のドップラー効果および音のうなりの関係を問う問題であったが、概ね高い正答率であった。
- 問3 直流回路の電圧降下、消費電力についての問題は高い正答率であったが、抵抗の直列・並列接続とオームの法則を問う問題では誤答が目立った。

面接

<面接内容と意図>

- (1) 本学科を志望する動機、将来の進路などについて質問し、学科の教育内容の理解度や学修意欲などを確認した。
- (2) 数学の基本問題に関する口頭試問では、必要に応じてヒントを与え、総合問題で確認できない受験生の持つ本来の実力を引き出そうとした。

<受験生の特徴と傾向>

- (1) 学科の教育内容と志望動機については、明確な回答が得られ、時間をかけて推敲し、繰り返し練習したことがうかがえた。将来の進路については、具体的なイメージを持っている受験生とそうでない受験生とに分かれた。
- (2) 口頭試問については、個人差が大きく、ヒントによって解法を思い出す受験生とうまく説明できない受験生とに分かれた。

◆ 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

工学の基礎である数学を大学で学ぶために、最低限必要な基礎学力を確認するための基本的な問題。

第2問（物理）

- 問1 物体の運動の基礎を確認する問題とした。
- 問2 ドップラー効果および音のうなりの基礎的な内容を確認する問題とした。

第3問（造形）

- 問1 建築のデザインを行う上で基礎的な素養として必要な立体的な空間の認識力・想像力、三次的な表現力、スケッチによる描写力等の総合的な造形力を見る。
- 問2 与えられたテーマに対して的確に題意を捉え、自らの見解を的確に述べているかを問う問題である。特に、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見る

<答案の特徴と傾向>

第1問 (数学)

どの問題も正答率が高いとはいえない結果であった。大学で学ぶことを望むのであれば、このレベルの数学は完全にマスターしてほしい。受験生には十分な復習を期待したい。

第2問 (物理)

問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の第2法則について問う問題であるが、いずれの法則も理解していない解答が目立ち、正答率は低かった。

問2 音源と観測者、それぞれが移動する場合のドップラー効果および音のうなりの関係を問う問題であったが、概ね高い正答率であった。

第3問 (造形)

問1 写真の建物がどのような立体であるかを想像し、異なった角度から描き出すことによって、立体的な空間の認識力、想像力、また、スケッチ力等を見た。異なる角度からの描写に関しては、ある程度、立体感覚があることがうかがえる答案が多かったが、建築物であるため、大きさを考慮し、視点の高さを踏まえた1点透視や2点透視図のような遠近感を描いた答案では、正確に表現できているものはあまりなかった。離れた距離から眺めて、立体的に描く描き方では、立体的な表現がうまくできているものも見られた。また、陰影をつけ立体感を表現している答案や素材感を表現したものも見られた。

問2 写真に写っている周辺環境と建物形態から、どのような場所で使われ、何のために建てられたかを想像し、説明することによって、想像力、発想力、論理的思考力、文章表現力を見た。文章自体は、しっかり書かれている答案が多かったが、中には、何のために建てられたかを説明していない答案や文章表現が話し言葉になっているものがあった。リゾート地でのホテルやレストランなどをあげ、周辺の自然環境を活かした建物であるとの答案が多く見られた。

なお、本建物は、アメリカの著名な建築家フランク・ロイド・ライトが設計したペンシルベニア州にある別荘であるが、知識を問う問題ではないので、別荘と答えた場合だけが正解とはしていない。

面接

<面接内容>

10分程度の個別面接を行った。

- ・高校生活の充実度や実績・積極性に関する質問
- ・環境問題に関する質問
- ・本学科の教育目的・内容の理解度および学科への適合性を確認するための質問
- ・「建築」に対する興味や意識の高さを確認するための質問
- ・本人の長所を確認するための質問

などに対し、回答を求めた。

<受験生の特徴と傾向>

本人の意見を的確に述べることができる受験生と、予め準備していた回答だけしか述べることができない受験生がいた。学科の特徴やカリキュラム内容及び「建築」に対する興味については、良く調べており、多くの受験生から本学科で学びたいという意欲が強く感じられた。建築に関する知識は、インターネット等でよく調べている学生が多かった。中には、実際に見たもしくは会った建築物や建築家について説明する受験生もいた。

◆ 国際環境工学部環境生命工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

（第1問 必須）

（第2問 A、B、Cから1題選択）

<出題の意図とねらい>

第1問

水質の代表的な指標である COD を例に取り、酸化還元反応、金属の反応、実験の基礎知識などを理解していることを確認するとともに、環境に対する基礎知識に基づく応用力や日本語読解力を確認する。

第2A問（物理）

問1 物体の運動の基礎を確認する問題とした。

問2 ドップラー効果および音のうなりの基礎的な内容を確認する問題とした。

第2B問（生物）

遺伝について、特にその基本的な法則性についての理解度を問う問題である。単に知識を暗記するだけでなく、具体的な事例をもとに法則の検証を行い、且つ、背景となる知識を記述する能力に重点をおいた出題とした。

第2C問（化学）

問1 原子の構造に関する基礎知識を有しているかを問う問題である。

問2 水溶液の濃度に関する基礎知識を問う問題である。質量パーセント濃度は硫酸銅(II)無水物をもとにした濃度であることに注意が必要である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1および問3は、簡単な計算であるが、計算間違いや単位の換算での間違いが多かった。問2および問4の正解率は低く、特に問5の正解率は10%未満であった。問5では、富栄養化の原因（原因は、窒素およびリンであり、有機化合物ではない）と答えた解答が多かった。

全体を通して言えることは、基本の理解が不十分なことである。基本をしっかりと理解させることが、応用にもつながるはずである。

第2A問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の第2法則について問う問題であるが、いずれの法則も理解していない解答が目立ち、正答率は低かった。

問2 音源と観測者、それぞれが移動する場合のドップラー効果および音のうなりの関係を問う問題であったが、概ね高い正答率であった。

第2B問（生物）

全体的に遺伝の基本的な知識について理解をしている答案が多かった。そのなかでも問1や問2は教科書の基本知識を問う平易な問題であったため、正解率は非常に高かった。問3では、正解率が低くはなか

ったが、なかには検定交雑の目的や操作法について正確に理解をしていない答案が目立った。問 4 の組換え価を求める問題については、複雑な計算を要さなかったことから、正解率が非常に高かった。問 5 の遺伝子の組換えに関する説明問題については、組換えが起こる時期について正確に理解をしていない答案が目立った。また、どのように組換えが起こるのかについても、大雑把な説明の答案が目立った。さらに、「遺伝子間の距離が大きいほど、組換えの起こる率は高くなる。」と説明した答案が目立ったが、これは本問の「いつ、どのように組換えが起こるか」という直接的な解答にはなっていない。字数制限のある記述問題は、与えられた字数のなかで、何を問われているかということを考え、きちんと文章を構成した上で答案を作成してもらいたい。問 6 と問 7 の分離比を求める計算問題については、正解率は概ね高かった。

第 2C 問 (化学)

問 1 おおよそ正答であった。質量数と原子量、同位体と同素体を間違っている解答が一部見受けられた。

問 2 正答はほとんど見られなかった。特に、濃度に関する基本的概念の理解が全くなされていない答案がほとんどであった。化学の基本的概念に対する理解力の向上が強く求められる。

面接

<面接形式と内容>

基礎学力、意欲、コミュニケーション能力、人物、その他の各項目について、5 人 1 組になり、30 分程度の集団面接を実施した。学力に関しては、理科教科と数学の分野からこれまでに学んだ中で興味を持った項目や用語をあげさせ、どのように興味を持ったのか説明を求める形式とした。

<受験生の特徴と傾向>

意欲に関する質問では、環境問題や化粧品開発等バイオ応用分野での話題および昨今のノーベル賞受賞テーマなど、科学関連ニュースの中から興味ある話題をあげる生徒が多く、事前の準備ができていたと考えられる。多くの受験生が的確な意見を述べる事ができたため、意欲の点で評価できる生徒が多かった。詳しい説明を求めた場合は、わかりやすく説明できた受験生と、理解不足あるいは間違えた理解に基づく発言をする受験生に大別出来た。学力については、自ら興味があると答えた項目であっても説明ができない者も見受けられた。

平成 25 年度入試の出題の意図、採点総評 《AO入試》

◆ 外国語学部英米学科 AO入試

<出題の意図・ねらい>

- 1、英文読解力と講義の聴解力を見る問題。英文はやや難易度が高いが、その分、講義を良く聴いて内容理解に努めているかが評価のポイントである。
- 2、模擬授業担当教員の説明を頭置きながら英文を読み、設問に正確に対応した解答を英文で論述する問題である。
- 3、模擬授業教員の説明を正しく聞き取り、その上で、自分の考えを論理的に述べる事が出来るかどうかを見る問題。語学力を超えた総合力を判断する問題である。

<答案の特徴>

- 1、文章を読むことに専念しすぎ、模擬授業担当教員の説明をあまり考慮しない答案が多かった。優秀な答案は、教員の説明にもとづいて文章を再読するところからスタートしていた。
- 2、完答できた答案は意外に少なかった。模擬授業担当教員の説明を正しく理解して英文を読み、設問に対応した解答をすることが高得点につながった。逆に、設問とずれた解答をした場合は当然点数が非常に低くなった。
- 3、完答できた答案はあまり多くなかった。優秀者はこの部分でもよい答案を作っていた。英語で論じることは確かに難しいかもしれないが、自分の考えを英語で論述することにもっと慣れておく必要がある。

<二次試験面接のポイント>

一次試験において英語の読解力および論述力を見ているので、二次試験では、口頭で意見を述べる力を見ることと、今後英米学科で学習していく上での適正を判断することがポイントとなる。

受験者はいずれも高い能力と適性を示していたが、入学枠の制約があり、上位者のみを合格とせざるを得なかった。

◆ 地域創生学群 AO入試

<出題の意図・ねらい>

今回のAO入試一次試験では、様々なテーマを検討した結果、グローバルな視点とローカルな視点を併せ持っているという点から、「地域社会と里山」をテーマとして取り上げ、一見すると関連性の見いだしにくいテーマと日常生活との間の意外な関連性や、日々の活動の重要性について考えるような模擬授業の内容としました。

地域創生学群の学生は、地域の方々と接点を持つ機会が多いため、相手の話している内容を把握する能力や、話の流れを理解し論理的に話を組み立てる能力が求められます。

そこで、設問では、模擬授業の内容全体を理解したうえで、その内容を簡潔にまとめることを求めました。具体的には、授業内容の論点を抽出したうえで、①その情報を取捨選択して論点整理をすることができるかどうか、②整理した論点の相互関係を考えて論理的な解釈をすることができるかどうか、という2点を評価の際の主なポイントとしました。

<答案の特徴と傾向>

全体の傾向として、①にあたる模擬授業で示した4つの論点については、しっかりと把握することができている答案が多く見受けられました。しかし、②にあたる各論点のキーワードがどのような意味なのか、適切な説明がなされている答案は少なかったといえます。また、模擬授業において、論点として提示したキーワードの理解を促すために付記した枝葉の部分の説明を長々と書いてある答案が目立ちました。そのため、論点となるキーワードは発見できたが、その各論点について、相互関係も含めて適切に説明できている答案は、ほとんど見受けられませんでした。

一方、各論点の相互関係を理解した上で、または熟考した上で、模擬授業の内容全体を総括できている答案も中にはあり、そのような答案は高く評価されました。

<集団面接>

集団面接では、地域創生学群における実習をはじめとした様々な活動をチーム単位で実践することを想定した際に必要となる能力の有無を見極めることを狙いとした。

<個人面接>

個別面接では、日々の様々な経験や体験から何かを学びとろうとする学習能力、常に目的意識を持って何かを身に付けようとする主体性の有無について見極めることを狙いとした。